平成20年度　文部科学省委託事業「総合的な放課後対策推進のための調査研究」（報告）

放課後子ども教室のボランティア指導員等に関する調査

特例財団法人 青少年野外教育財団

平成20年度　　文部科学省委託事業

「総合的な放課後対策推進のための調査研究」（報告）

放課後子ども教室のボランティア指導員等に関する調査

平成21年2月

特例財団法人 青少年野外教育財団

はじめに

このたび、青少年野外教育財団では、文部科学省から「総合的な放課後対策推進のための調査研究」を受託して、国の補助事業である「放課後子ども教室推進事業」等で、放課後においてボランティア指導員等として子どもたちとかかわる人たちの実態を把握することにいたしました。

調査研究に当たっては、外部の有識者の協力を得て研究会を設置し、先行研究で示されている事例を取り上げて、実際に地域でアドバイザーや安全管理員、ボランティアとして子どもたちの指導等に携わっている方々を対象として、活動の実態を統計的手法と個人から聞取りによって、明らかにしようと試みました。

統計的調査の実施に当たっては、東京都江戸川区教育委員会、神奈川県横浜市のご理解を得て、「すくすくスクール」（江戸川区）、「はまっ子ふれあいスクール」、「キッズクラブ」（横浜市）で、放課後において子どもたちの指導等に携わる方々にアンケート調査にご協力いただき、その全体像を把握するように努めました。

また、聞取り調査の実施に当たっては、横浜市、新潟県教育委員会、兵庫県尼崎市、大分県杵築市、及び沖縄県那覇市の各教育委員会のご理解を得て、各市が実施する放課後子ども教室等で実際に子どもたちの安全管理や指導に携わる方々から直接実情を聞くことができました。

本報告書は、この二つの調査を整理して編集したものです。私どもとしては、報告書が国はもとより地方公共団体で「放課後子ども教室推進事業」に携わる方々が、同事業の一層の充実のために活用されることを期待しております。

おわりに、アンケート調査及び聞取り調査にご協力いただきました各位に感謝申し上げますとともに、限られた期間、お忙しい中で本調査研究にご協力をいただきました研究委員各位に改めてお礼申し上げます。

平成21年2月

特例財団法人 青少年野外教育財団

目　次

はじめに
Ⅰ　調査研究の概要……1
1.調査の目的
2.調査方法及び対象
3.調査研究組織

Ⅱ　統計的調査結果……2
1.調査の目的
2.調査の対象
3.調査の実施方法
4.調査時期
5.回収結果
6.結果の概要
(1)回答者の属性 ……6
(2)単純集計･性差･年齢差からみたプロフィール ……7
(3)給与タイプからみた意識･実態の違い……35
まとめ……49

Ⅲ　聞取り調査結果―5つのケーススタディ……52
1.民間団体の主導による運営 ……54
はまっ子ふれあいスクール(横浜市)
2.行政と地域のパートナーシップ ……62
のびのび学習教室(新潟県五泉市)
あそびの城(新潟県長岡市)
つくしっ子クラブ(新潟県三条市)
3.行政主導によるボランティア育成 ……72
こどもクラブ(兵庫県尼崎市)
4.NPOと行政の協働による運営 ……78
にっこ･にこ教室(大分県杵築市)
5.学校と地域団体のパートナーシップ ……84
若狭小ふれあい教室(沖縄県那覇市)

Ⅳ　資　料 ……91
1.アンケート調査票 ……92
2.集計結果 ……96

Ⅰ　調査研究の概要

1.調査の目的

「放課後子ども教室推進事業」の充実に資するため、地域で放課後において実際に子どもたちの指導等に当たるボランティア指導員等の実情を把握し、市町村がボランティア指導員等を養成・確保する上での参考とする。

2.調査方法及び対象

（1）質問紙調査

東京都江戸川区「すくすくスクール」及び神奈川県横浜市「はまっ子ふれあいスクール」、「キッズクラブ」で放課後において子どもたちの指導等に当たる者を対象にアンケート調査を行った。

（2）聞取り調査

横浜市「はまっ子ふれあいスクール」、新潟県五泉市、長岡市、三条市の各放課後子ども教室推進事業、兵庫県尼崎市「こどもクラブ」、大分県杵築市「にっこ・にこ教室」、沖縄県那覇市「若狭小ふれあい教室」で放課後において子どもたちの指導等に当たる者を対象からヒヤリングを行った。

3.調査研究組織

学識経験者及び社会教育の実務者等による研究会を設置して調査研究を行った。

明石　要一　千葉大学教授
上田　裕司　国立教育政策研究所
　　社会教育実践研究センター社会教育調査官
五十嵐秀介　国立教育政策研究所
　　社会教育実践研究センター専門調査員
小野寺　蔵　特例財団法人青少年野外教育財団専務理事
金藤ふゆ子　常磐大学准教授
白石　　収　朝日学生新聞社広報部部長
土屋　隆裕　統計数理研究所准教授
平野　吉直　信州大学教授
結城　光夫　国立青少年教育振興機構
　　国立中央青少年交流の家所長

（調査研究協力者）

大瀧　景子　千葉大学教育学部大学院生
門間　雅利　千葉大学教育学部教育社会学研究室研究生

Ⅱ　統計的調査結果

(1) 調査の目的

放課後子ども教室の実質的な担い手である活動指導員（スタッフ）のキャリア形成や、教室における活動内容や問題点・要望などを調査し、今後の事業に関する施策などを検討する。

(2) 調査の対象

横浜市および江戸川区の放課後子どもプランを実施している教室

■横浜市・・・・はまっ子ふれあいスクール・放課後キッズクラブ　全 350 教室

■江戸川区・・・すくすくスクール　全 73 教室

(3) 調査の実施方法

質問紙の郵送による調査を実施。

(4) 調査時期

発送　2 月上旬

回収　2 月中旬～下旬まで

(5) 回収結果

配布数	有効回収数	有効回収率
1065 人	768 人	72.1%

＜この報告書を読む際の注意＞

1) 百分率(%)は有効回収数（回答者限定質問の場合は当該者数）を基数として算出し、少数第 2 位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、各項目の数値の和が 100 とならない場合がある。なお、無回答は含まないものとしている。

2) 複数回答の設問では、回答率の合計は 100%を超える場合がある。

3) 一部の図表では、対比を明確にするために選択肢の順序を入れ替えている。

4) 報告書内のクロス集計における「＊」は有意差を示すものであり、SIGNIFICANCE を（P）とし、以下の表にならい表記している。

＊＊＊	P≦0.01
＊＊	0.01＜P≦0.05
＊	0.05＜P≦0.1
	0.1＜P

(6) 結果概要

＜単純集計・性差・年齢差からみたプロフィール＞

①参加経験のあるボランティア活動

PTA 役員・委員をしてきた女性が多く、8 割以上が経験している。次いで、地域の子どもの世話役をしてきた人が 6 割いた。

②最も熱心に取り組んだボランティア

男性は自治会役員が多く、3 割近い回答があった。女性は PTA 役員・委員が 5 割であった。

③ボランティアの参加頻度・期間

1 年以上の長期的な参加をしてきた人が 8 割以上であった。参加頻度は 1 ヶ月に 1～3 回が最も多く、4 割程であった。

④ボランティアに参加した理由

男性は「地域に貢献したい」「自分の趣味が生かせる」という理由が比較的多く、女性は「子どものため」「必要に迫られた」などの理由が多い。

⑤現在携わっている放課後活動について

はまっ子ふれあいスクールが 6 割強と多く、次いですくすくスクールが 2 割強、放課後キッズクラブが 1 割であった。

⑥放課後活動における立場

男性においてチーフパートナーは 6 割と多く、女性はアシスタントパートナーが 4 割ほどと最多であった。また、60 代以上の中ではチーフパートナーが 5 割ほどと多くなっている。

⑦放課後活動への参加頻度

男性の 6 割強は週に 5 日以上、女性の 4 割強は週に 2～4 日参加している。

⑧放課後教室における役割

9 割近くの人が子どもとの活動をメインにしているが、その中でも男性は事務的な作業を、女性は子どもを守る・管理する役割を担っている。

⑨放課後教室の主な活動分野

自由遊びが 85%、次いで工作が 70%、年中行事が 61%となっている。

⑩活動に対する謝金

77%の回答者が謝金を支給されている。40 代以下、50 代では 8 割近く支給されているのに対し、60 代以上では 6 割にとどまっている。

⑪活動を通しての自身の変化

女性のほうが保護者や地域とのかかわりを持つようになったと、変化を感じている。

⑫指導員としての研修の受講経験

全体では 6 割ほどが受講しており、50 代では約 7 割と他年齢より受講経験がある。

⑬受講して役立った研修

主に危機管理と特別支援の研修が役立った。

⑭あれば受講してみたい研修

男性は運営に関する知識、女性は子ども理解に関する研修を受けたいと考えている。

⑮活動における問題点

学校との連携調整に問題を感じている人が 3 割ほどで最も多く、50 代が全体的に問題と感じていることが多い。

⑯行政への要望

予算の拡充が 5 割ほどで、次いで保護者理解ができる仕組みづくりと、人材確保が 4 割ほどであった。

＜給与タイプからみた意識・実態の違い＞

給与のタイプを固定給、時給／日当、無償の 3 タイプに分類してクロス集計・分析を行った。

①給与タイプからみる参加経験のあるボランティアの違い

固定給タイプは自治会役員などの地域でのリーダーシップを発揮する活動が多い(54%)。

時給／日当タイプでは PTA 役員・委員をしてきた人が 9 割近くとなっている。

無償タイプでは地域美化などの一般的なボランティアへの参加がみられる。

②給与タイプからみるボランティアの参加頻度・期間の違い

固定給・無償タイプは、ボランティアを 5 年以上続けたことがある人が 4 割強だったのに対し、時給／固定給タイプは 5 年以上続けた人は 3 割弱にとどまり、1～5 年ほど続けた人が 5 割強となった。

③給与タイプからみるボランティアへの参加理由の違い

固定給タイプは、使命感や積極性から参加するという理由が比較的多い。

時給／日当タイプは、他の誰かのために参加するという理由が多い。

無償タイプは、地域社会への貢献や自分の生きがいが多い理由となった。

④給与タイプからみる教室での活動頻度の違い

固定給タイプはほぼ全員が 1 週間に 5 日以上活動しており、時給／固定給タイプは 1 週間に 2～4 日の参加が 9 割であった。無償タイプは 1 ヶ月に 1～3 回が最も多く、4 割弱であった。

⑤給与タイプからみる教室における役割の違い

固定給タイプは、事務を含めた全ての役割を担っているが、時給／日当タイプは子どもとの活動や子どもの健康管理などが中心となっている。無償タイプは、子どもとの活動以外はあまり担ってない。

⑥給与タイプからみる活動を通しての自身の変化の違い

固定給タイプは、他の組織・機関への関心が高くなったと答えている。時給／日当タイプ、無償タイプとも保護者との交流をもつようになったということが 7 割以上と多いが、時給／日当タイプでは加えて地域との交流をもつようになったと答えている。

⑦給与タイプからみる役立った研修の違い

指導員として受講した研修のうち、役立ったものについて回答していただいた。

固定給タイプは、特別支援に関する研修をはじめ、(64%)多くの研修が役立ったと回答しているが、時給／日当タイプは他より役立ったと感じた研修が少ない。

⑧給与タイプからみる受講してみたい研修の違い

時給／日当タイプが、他タイプよりも多くの分野で研修を受けたいと思っている。特に、子ども理解に関する研修が 5 割近くと多くなっている。

⑨給与タイプからみる活動における問題点の違い

時給／日当タイプの 4 割は学校との連携に問題を感じている。また、無償タイプの 4 割弱は子どもの保護者が参加しないことに問題を感じている。

⑩給与タイプからみる行政への要望の違い

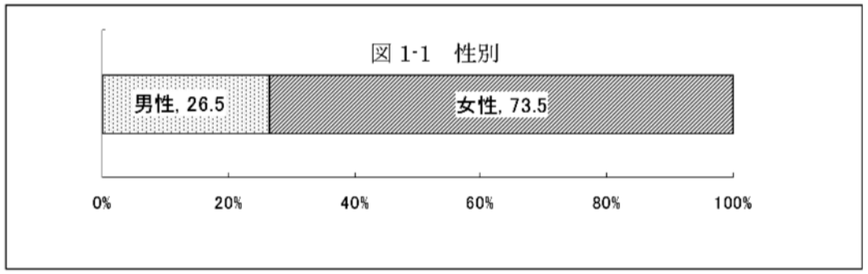
固定給タイプは、多くの要望があるが、特に予算の拡充を要望する人が 6 割いる。

時給／日当タイプは、予算より保護者との理解ができる仕組みづくりを求めている。

1. 回答者の属性

1.1 性別

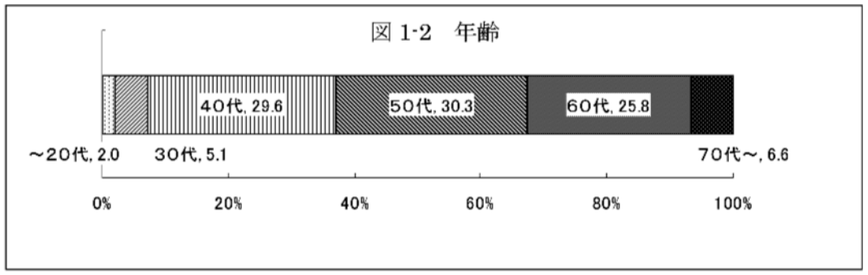
「男性」が 26.5%、「女性」が 73.5%と、女性の回答数が多いという構成であった。

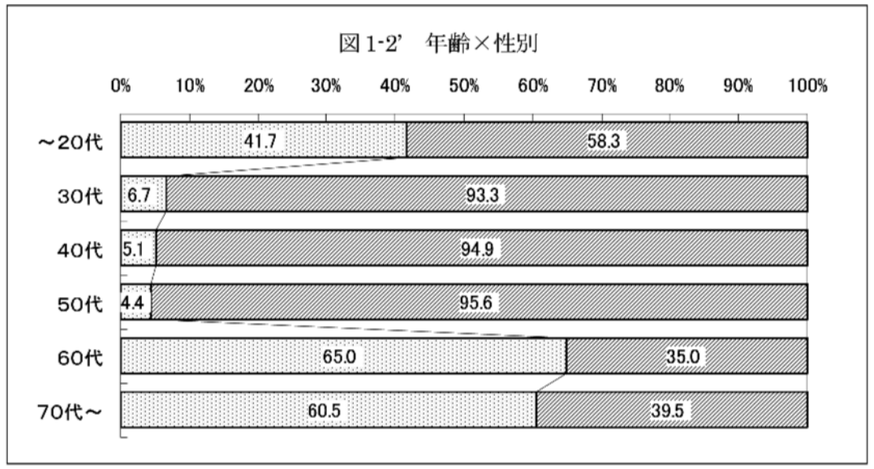


1.2 年齢

「～20 代」が 2.0%、「30 代」が 5.1%と低い数値となった。「40 代」が 29.6%、「50 代」が最も多く 30.2%、「60 代」が 25.8%、「70 代～」が 6.6%となった。

また、年代ごとの男女の割合をみると、「～20 代」から「50 代」においては女性が多く、「60 代」以上になると男性がやや多い。





2. 単純集計・性差・年齢差からみたプロフィール

属性についで、回答者の経験などの特性を、単純集計・性差・年齢差でみていく。

2.1 参加経験のあるボランティア活動　―子どもの世話役をしてきた女性が多い―

回答者の特性をみるため、過去のキャリア形成についてみていきたい。

放課後子どもプランに参加するようになる以前に、どのようなボランティアに関する取り組みをしてきたのかについて尋ねた。

複数回答のなかで最も多かったのが「PTA 役員・委員」の 66.7%、次いで「地域の子ども会の世話役」が 50.0%、「自治会の役員」が 49.8%で半数近くとなった。上位 2 つはいずれも子どもに関連するボランティアといえる。

表 2-1　参加経験のあるボランティア　(%)

1	**PTA役員・委員**	**66.7**
2	**地域の子ども会の世話役**	**50.0**
3	**自治会の役員**	**49.8**
4	防犯パトロール（子どもの登下校時の安全確保も含む）	42.4
5	学校での授業支援	28.5
6	地域美化ボランティア	16.9
7	読み聞かせのボランティア	16.4
8	福祉ボランティア	15.9
9	民生児童厚生員	9.1
10	学校での部活動の指導	8.6
11	全くしたことがない	7.9
12	その他	7.8
13	少年野球やサッカーなどのコーチ	6.1
14	公民館や生涯学習センターでのボランティア	5.6
15	図書館や美術館でのボランティア	3.3
16	消防団	2.6
17	災害派遣ボランティア	2.2

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

ボランティア経験を、性差・年齢差でみていく。表 2-1A は性別で、表 2-1B は年齢でクロスをとっているので、ご覧いただきたい。なお、表 2-1B の年齢とのクロスでは、便宜的に年齢を「～40 代」、「50 代」、「60 代～」として数値を再割り当てしてある。以下、年齢とのクロス集計表は同じとする。

性差に関しては、ボランティアに「全くしたことがない」(18.8%)という割合が男性のほうが多く、逆に女性は多くの項目で参加経験が多いことがわかる。特に、「地域の子ども会の世話役」(61.4%)や「PTA 役員・委員」(84.6%)は女性のほうが圧倒的に多い。女性のほうが、積極的にボランティアに参加した経験をもっているといえる。

また、次いで差の大きい項目「防犯パトロール」や「読み聞かせのボランティア」から、**子どもの世話をする・子どもに関わるボランティアをしてきた女性**が多いといえる。

表 2-1A　参加経験のあるボランティア　×　性別　(%)

		男性		女性	
1	全くしたことがない	**18.8**		3.8	***
2	少年野球やサッカーなどのコーチ	**16.8**		2.9	***
3	学校での部活動の指導	**16.1**		6.0	***
4	消防団	**5.4**	>	1.8	***
5	災害派遣ボランティア	**4.0**		1.1	**
6	地域美化ボランティア	17.4		16.5	
7	図書館や美術館でのボランティア	2.0		3.8	
8	公民館や生涯学習センターでのボランティア	3.4		6.3	
9	民生児童厚生員	5.4		10.0	***
10	その他	4.0		9.2	**
11	学校での授業支援	24.2	<	29.5	
12	福祉ボランティア	10.7		**17.0**	**
13	自治会の役員	43.0		**51.6**	***
14	読み聞かせのボランティア	4.0		**20.9**	***
15	防犯パトロール（子どもの登下校時の安全確保も含む）	28.9		**47.1**	***
16	地域の子ども会の世話役	20.1	<<	**61.4**	***
17	PTA役員・委員	13.4		**84.6**	***

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

年齢差に関しては、「PTA 役員・委員」は 40 代以下と 50 代で多く、ともに 8 割以上となっているのに対し、60 代以上では 3 割未満と大きくひらいている。逆に、「自治会の役員」では 50 代と 60 代以上に多く、ともに 5 割以上に対し、40 代以下では 4 割に満たない。自治会役員は、ある程度地域の代表となりうる年齢に応じていると考えられる。

「防犯パトロール」(54.2%)、「学校での授業支援」(36.9%)、「読み聞かせのボランティア」(26.7%)等、子どもとふれあう機会のあるボランティアに関して、40 代以下が他より高い割合となっている。

40 代以下と 50 代にある程度の共通性がみられるのは、先の図 1-2'(P.○○)からわかるように、どちらも多くを女性が占めていることが牽引していると考えられる。

表 2-1B　参加経験のあるボランティア　×　年齢　(%)

		～40 代	50 代	60 代～	
1	PTA役員・委員	**84.4**	**88.2**	27.7	***
2	地域の子ども会の世話役	54.7	**68.3**	29.2	***
3	防犯パトロール（子どもの登下校時の安全確保も含む）	**54.2**	41.4	31.7	***
4	自治会の役員	37.8	**59.7**	**53.0**	***
5	学校での授業支援	**36.9**	26.3	20.3	***
6	読み聞かせのボランティア	**26.7**	15.8	5.9	***
7	地域美化ボランティア	12.9	19.9	19.8	*
8	福祉ボランティア	12.0	18.3	17.8	
9	その他	7.6	9.7	5.9	
10	学校での部活動の指導	7.1	4.3	**14.9**	***
11	少年野球やサッカーなどのコーチ	7.1	2.2	9.4	**
12	民生児童厚生員	5.3	**12.4**	9.9	**
13	公民館や生涯学習センターでのボランティア	5.3	7.5	4.0	
14	全くしたことがない	5.3	4.3	13.4	***
15	消防団	2.2	2.2	3.5	
16	災害派遣ボランティア	0.4	2.7	3.5	*
17	図書館や美術館でのボランティア	0.0	6.5	4.0	***

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

2.2 最も熱心に取り組んだボランティア —男性は自治会、女性は PTA—

前述の経験したボランティアの中で、最も熱心に取り組んだボランティアをひとつ選択していただいた。「PTA 役員・委員」(41.0%)をはじめ、上位はほぼ回答の多かった項目と同様になった。

表 2-2　最も熱心に取り組んだボランティア　(%)

1	**PTA役員・委員**	**41.0**
2	地域の子ども会の世話役	10.8
3	自治会の役員	9.7
4	読み聞かせのボランティア	5.0
5	その他	4.5
6	福祉ボランティア	4.1
7	少年野球やサッカーなどのコーチ	4.0
8	学校での授業支援	3.6
9	民生児童厚生員	3.4
10	学校での部活動の指導	3.1
11	地域美化ボランティア	1.6
12	公民館や生涯学習センターでのボランティア	1.3
13	防犯パトロール(子どもの登下校時の安全確保も含む)	1.1
14	図書館や美術館でのボランティア	1.1
15	消防団	0.2
16	災害派遣ボランティア	0.2
17	全くしたことがない	---

(単一回答：あてはまる項目に○をつける)

性別による差をみていきたい。男性は「自治会の役員」が 27.4%と多いのに対し、女性は「PTA 役員・委員」が 52.5%となっており、はっきりと差が出ている。

男性は、地域社会・子どもの指導に関するボランティア、女性は子どもの世話をするボランティアに、熱心に取り組んできたことがわかる。

表 2-2A　最も熱心に取り組んだボランティア × 性別　(%)

		男性		女性	***
1	自治会の役員	**27.4**		5.4	
2	学校での授業支援	12.0		1.7	
3	少年野球やサッカーなどのコーチ	11.1		2.0	
4	学校での部活動の指導	9.4	>	1.2	
5	地域美化ボランティア	4.3		1.2	
6	防犯パトロール(子どもの登下校時の安全確保も含む)	2.6		0.7	
7	図書館や美術館でのボランティア	2.6		0.7	
8	民生児童厚生員	4.3		3.2	
9	公民館や生涯学習センターでのボランティア	1.7		1.2	
10	消防団	0.0		0.2	
11	災害派遣ボランティア	0.0		0.2	
12	その他	4.3	<	4.9	
13	福祉ボランティア	2.6		4.7	
14	読み聞かせのボランティア	2.6		6.7	
15	地域の子ども会の世話役	6.0		13.3	
16	PTA役員・委員	9.4	<<	**52.5**	
17	全くしたことがない	---		---	

(単一回答：あてはまる項目に○をつける)

2.3 ボランティアの参加頻度・期間 —1年以上の長期的な参加が多い—

前述の、最も熱心に取り組んだボランティアについて、その参加の頻度と参加機関を尋ねた。全体的に、参加頻度としては「1ヶ月に1～3回」が40.5%と最も多く、参加期間は「1年～5年ほど」が44.2%、「5年以上」が37.6%となっており、**8割以上の人が1年以上ボランティアに継続的に取り組んできた**ということがわかる。

表 2-3A　参加の頻度　(%)

1	1週間に5日以上	2.5
2	1週間に2～4	24.1
3	1週間に1日	17.8
4	1ヶ月に1～3回	**40.5**
5	長期の休みのみ	1.3
6	特別なイベント時のみ	11.0

表 2-3B　参加期間　(%)

1	単発・1週間以内	2.3
2	1ヶ月ほど	0.5
3	2ヶ月～半年ほど	0.7
4	半年～1年ほど	12.6
5	1年～5年ほど	**44.2**
6	5年以上	**37.6**

表 2-3A' 参加の頻度 × 年齢　(%)

		～40代	50代	60代～
1	1週間に5日以上	1.5	2.9	4.7
2	1週間に2～4	25.9	25.7	23.1
3	1週間に1日	14.6	18.3	22.5
4	1ヶ月に1～3回	**44.4**	**45.1**	33.7
5	長期の休みのみ	1.5	0.6	1.8
6	特別なイベント時のみ	12.2	7.4	14.2

表 2-3B' 参加期間 × 年齢　(%)

		～40代	50代	60代～	**
1	単発・1週間以内	1.9	1.1	4.2	
2	1ヶ月ほど	0.5	0.0	1.2	
3	2ヶ月～半年ほど	1.4	0.0	0.6	
4	半年～1年ほど	16.3	9.6	11.9	
5	1年～5年ほど	**49.8**	**49.2**	36.3	
6	5年以上	30.1	40.1	**45.8**	

（単一回答：あてはまる項目に○をつける）

年齢差でみていくと、やはり長期的に5年以上ボランティアに参加してきたのは、60代以上が多いという回答だった。

2.4 ボランティアに参加した理由 —男性は地域と自分、女性は子どものため—

では、なぜそのボランティアに参加することになったのか、理由を尋ねた。

上位から順に、「子どもや孫のためになるから」(47.7%)、「地域に貢献したいから」(37.1%)と、誰か他の人のために参加した人が多いことが伺える。次いで、「活動内容が楽しそうだったから」が28.2%。「必要に迫られたから」というネガティブな参加が21.8%、同様に「自治会などで持ち回り（義務）だから」というのが19.6%と、5人に1人は進んで参加したわけではないと答えている。

表 2-4 参加した理由　(%)

1	**子どもや孫のためになるから。**	**47.7**
2	**地域に貢献したいから。**	**37.1**
3	**活動内容が楽しそうだったから。**	**28.2**
4	**自分の経験が必要とされていたから。**	**25.7**
5	**必要に迫られたから。**	**21.8**
6	人生において生きがいになりそうだから。	20.9
7	地域の方が取り組んでいるから。	20.5
8	自治会などで持ち回り(義務)だから。	19.6
9	自分の趣味が生かせるから。	16.2
10	自分の職場での経験や能力が生かせるから。	12.1
11	家族が取り組んでいるから。	5.8
12	その他	4.3

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

性差をみると、男性は「自分の趣味が生かせるから」(26.4%)、「地域に貢献したいから」(45.5%)「自分の経験が必要とされていたから」(27.3%)と、自分を活かす場面や、地域に貢献するといった活動理由に差がみられる。一方女性は、「子どもや孫のためになるから」(54.3%)、「活動内容が楽しそうだったから」(32.0%)、「必要に迫られたから」(25.8%)という割合が比較的高かった。

男性は自分のため、地域社会のためという参加が多く、女性は子どものためという理由もありながらも、無理にさせられたというネガティブな参加も多い。

表 2-4A　参加した理由　×　性別　　(%)

		男性		女性	
1	自分の趣味が生かせるから。	**26.4**		14.4	***
2	地域に貢献したいから。	**45.5**		33.9	*
3	自分の経験が必要とされていたから。	**33.1**		23.4	**
4	地域の方が取り組んでいるから。	**27.3**		19.3	**
5	自分の職場での経験や能力が生かせるから。	16.5	>	10.2	**
6	人生において生きがいになりそうだから。	24.8		19.0	
7	自治会などで持ち回り(義務)だから。	19.8		19.3	
8	その他	4.1		3.7	
9	家族が取り組んでいるから。	2.5		6.7	*
10	必要に迫られたから。	9.1		**25.8**	***
11	活動内容が楽しそうだったから。	14.9	<	**32.0**	***
12	子どもや孫のためになるから。	24.8		**54.3**	***

(複数回答：あてはまる項目に○をつける)

2.5　現在携わっている放課後活動について

ここまで回答者の属性や経験からプロフィールをみてきた。ここからは、実際に放課後子どもプランとの関わりや具体的な考えなどをみていきたい。

まず、現在携わっている活動について尋ねた。全体で集計すると、「すくすくスクール」が 23.7%、「はまっ子ふれあいスクール」が 64.6%、「放課後キッズクラブ」が 11.4%という割合になった。

性別では男性の「すくすくスクール」(30.2%)での活動が女性よりやや多い。

年齢別でみると、60 代以上の人の「すくすくスクール」(37.3%)が比較的多く、50 代では「はまっ子ふれあいスクール」(76.3%)が他年代より高い割合となった。

図 2-5　現在携わっている活動

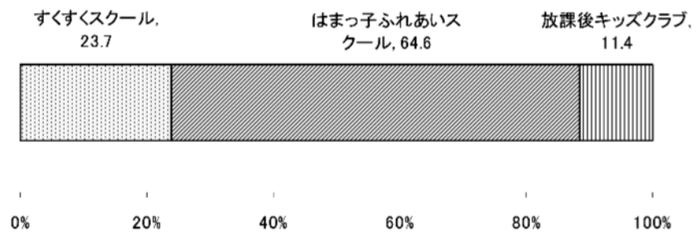


図 2-5A　現在携わっている活動　×　性別

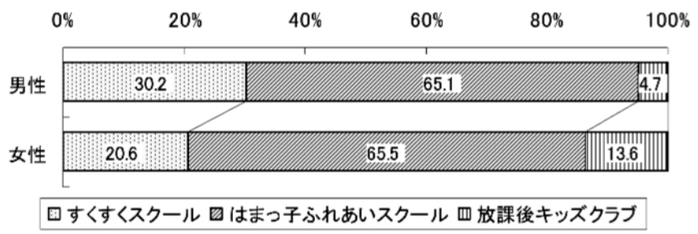
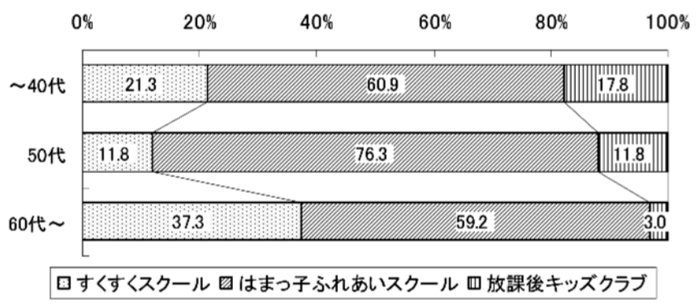


図 2-5B　現在携わっている活動　×　年齢



(単一回答：あてはまる項目に○をつける)

2.6 放課後活動における立場

回答者が、その放課後子ども教室において、どのような立場なのかを尋ねた。表 2-6 は、項目番号 1～4 が「すくすくスクール」、項目番号 5～6 が「はまっ子ふれあいスクール」、項目番号 7～9 が「放課後キッズクラブ」における立場の名称となっている。

上記のように、はまっ子ふれあいスクールで活動している回答者が多いため、「チーフパートナー」(32.8%)や「アシスタントマネージャー」(32.8%)の割合が高くなっている。

表 2-6 現在の立場 (%)

1	クラブマネージャー	0.3
2	サブマネージャー	0.3
3	プレイングパートナー	0.2
4	サポーター	6.3
5	チーフパートナー	32.8
6	アシスタントパートナー	32.8
7	主任常勤指導員	6.1
8	常勤指導員	1.5
9	補助指導員	3.1
10	無償ボランティア	15.4
11	その他	0.8

（単一回答：あてはまる項目に○をつける）

性差や年齢差に注目すると、男性では「チーフパートナー」が 61.2%と最も多く、女性では「アシスタントパートナーが 42.4%と最も多い。年齢は 60 代においては「チーフパートナー」(49.5%)と「無償ボランティア」(25.7%)が比較的多く、40 代以下、50 代では「アシスタントパートナー」(46.2%・43.0%)が比較的多い。

これより、60 代以上・男性のチーフパートナー、50 代以下・女性のアシスタントパートナー、60 代以上の無償ボランティアが本調査において高い割合をしめていることがみえる。

表 2-6A 現在の立場 × 性別 (%)

		男性	女性	***
1	クラブマネージャー	0.7	0.2	
2	サブマネージャー	1.4	0.0	
3	プレイングパートナー	0.0	0.2	
4	サポーター	7.5	5.4	
5	チーフパートナー	**61.2**	24.1	
6	アシスタントパートナー	5.4	**42.4**	
7	主任常勤指導員	3.4	6.9	
8	常勤指導員	0.7	1.6	
9	補助指導員	0.7	4.2	
10	無償ボランティア	17.7	14.1	
11	その他	1.4	0.9	

（単一回答：あてはまる項目に○をつける）

表 2-6B 現在の立場 × 年齢 (%)

		～40 代	50 代	60 代～	***
1	クラブマネージャー	0.0	0.0	1.0	
2	サブマネージャー	0.0	0.0	1.0	
3	プレイングパートナー	0.4	0.0	0.0	
4	サポーター	7.6	3.2	7.4	
5	チーフパートナー	16.1	34.9	**49.5**	
6	アシスタントパートナー	**46.2**	**43.0**	9.9	
7	主任常勤指導員	9.9	5.9	1.0	
8	常勤指導員	3.6	0.0	0.5	
9	補助指導員	4.0	4.3	1.5	
10	無償ボランティア	11.7	8.6	**25.7**	
11	その他	0.4	0.0	2.5	

（単一回答：あてはまる項目に○をつける）